

〈隣人〉とは、特定の人や集団を示すものではなく「自分がなっていくもの」です。イエスは「あなたも隣人になりなさい」と祭司やレビ人だけではなく、〈わたしたち〉にも言っているのです。とてもむずかしいことですが、人生で出会う人たちに、「きょうダメでも、あした、あの人の隣人になろう」という気持ちを持ち続けることが大切なのです。〈祈り〉はそのためにもあります。さて、『わたしが・棄てた・女』にもどります。きょうは、吉岡とミツの人生に起こったできごとを追っていきます。

#### 『ぼくの手記（四）』（p.94～p.113）

吉岡はなんとか大学を卒業して、日本橋の釘問屋に就職します。そこは従業員 20 人の小さな会社です。「鶏口となるも牛後となるなかれ」、つまり「大きな団体で人の尻についているよりも、小さな集団で頭（かしら）になるほうがよい」という彼のもくろみがそこにはありました。20 人のうち男性は 15 人、大学出もあまりいず、新入社員は一人だけ。そんな会社ですから、「出世」という目標を実現するには好適な職場を選んだわけです。そして『成功の秘訣』、『あなたはこうして出世する』、また『信念の魔術』というようなハウ・ツーものの本を買い込む吉岡でした。

その会社には、社長の姪にあたる**三浦マリ子**という女性が勤めていました。吉岡は彼女の『黒くて水晶みたいに光っている』目を『きれいだな』と思い、交際してみたいという感情を抱きます。さらに『今一つ、別の気持ち』—『この娘は社長の親類だ。気に入られて損はない。少なくとも彼女に好感をもたれておけば、いつかは得をすることがあるだろう。』という功利的な気持ちをもったのでした。そしてソロバンが苦手だった吉岡は、マリ子にソロバンを教えてほしいと頼みこみ、彼女への接近作戦を開始しました。

新しい人生を歩みだした吉岡にとって、ミツはどんな存在になっていたのでしょうか。『…森田ミツの姿は心から消えていた。（中略）水平線の彼方に、だんだん去っていく船のように、彼女の姿も、ぼくの記憶のなかで、細い線となり、小さな点となり、やがて消滅してしまったのだ。ぼくの人生と、なんの関係もないし、今後関係ないと思っていた。』

吉岡はミツを、自分とはすでにまったく関係のないひとりの女性と考えていたのでした。

マリ子との交際が順調にすすんでいたある日、会社の慰安旅行で山中湖に向かうバスの中、彼女が以前、経堂の製薬工場で事務をしていたことを知ります。そうです。ミツが勤めていた工場です。一緒に働いていた従業員の名前を確認すると、やはりミツがいました。その場はうまくごまかした吉岡でしたが、マリ子が一時期でもミツと同じ会社にいたことに驚きました。

そして、帰りのバスが御殿場街道にさしかかったとき、林の中に『兵舎のように幾列にも並んだ木造の建物』が見えました。それはハンセン病の人たちを収容する病院でし

た。『暮れなずむ灰色の雲の下、畠も建物も陰鬱に、孤独におしだまり、一種いいような悲しみと暗い影をただよわせているように見え』る建物でした。気の毒に思うマリ子とはちがい、吉岡は『ハンセン病の病人がぼくらと何の関係があるのだろう。あの連中はぼくと全く無縁な存在だ』と感じただけでした。その後、『…ぼくは知らなかったのだ。ぼくたちの人生では、他人にたいするどんな行為でも、太陽の下で氷が溶けるように、消えるものではないことを。ぼくたちがその相手から遠ざかり、全く思いださないようになって、ぼくらの行為は、心のふかい奥底に痕跡をのこさずには消えないことを知らなかったのだ。』と彼に思わせるできごとが起こることなど知らずに ……。

### 『ぼくの手記（五）』（p.114～p.133）

吉岡は、自分に『好意以上のものを持ちはじめたように思われた』マリ子とは、『まだ一度もキスをかわしたことはな』く、『ミツならば見さげて、その体を奪っても当然だと思っただけ』は、彼女の信用を失いたくない気持ちや、その関係がくずれば同僚の笑いや、という恐れゆえに、その衝動をグッとがまんしていたのです。しかし、東京へ帰ると、同僚といっしょに男の欲望を処理するところへ行くのでした。

それまでも吉岡はマリ子とのデートを済ませたあと、2～3度同じようなところへ行ってたのです。あるとき、新宿の店で相手になった女性が首に『小さな、よごれた十字架』をつけているのを見ました。それはミツが1回目のデートの帰り、安物の十字架を3つ買ったうちのひとつでした。吉岡はミツがくれた十字架をその日のうちに捨てていました。それと同じ十字架が女性の胸にぶらさがっていたのです。聞くと、『ここに勤めていた人』にもらったというのです。名前をたずねると『ミツちゃん』。森田ミツだったのです。その女性によれば、ミツはいつも吉岡のことを言っていたといいます。『ミツちゃんは本当にあんたのこと好きだったのよ。ずっと好きだったのよ』。ミツは男の人たちにヘンなことをされるのがいやで辞めたとわかりました。

### 『ぼくの手記（六）』（p.135～p.155）

いかがわしい所でマリ子とは満たせない衝動を処理していた吉岡は、ある日同僚に店から出てくるところを見られ、口止め料としてお金を要求されます。お金に余裕のある生活とはいえなかったので、借金するためあのスワン興業の金さんを訪ねます。すると金さんは、川崎に新しい事務所をつくりパチンコ屋を始めるといいます。ミツが川崎のどこかにいるらしいということを新宿の女性から聞いていた吉岡は、金さんにミツを見つけてほしいと頼みます。

しばらくして金さんから、ミツはパチンコ屋で働いていたが店のお金をごまかして辞めさせられたと連絡がありました。くわしい話を聞くために、金さんのトモダチに会いに出かけた吉岡は、そのパチンコ屋で働く一人の娘からミツが店のお金を盗んだ理由を聞きだします。ミツは、カリエスを病む兄のために治療費を何度も前借していた馬場さんが店長に断られ、つい店のお金に手を出してしまったので、『自分は一人暮らしだから、馬場さんの代わりに責任をとってあげる気になって…自分がやりましたってマスターに言っ』たというのです。そして『いやらしい酒場』で働かされることになったのです。

『今までそれほどふかく思いもしなかったあいつの人生を、霧雨のなか、頬や首をぬらしながら、指をかみながらぼくは考えた。パチンコの球が釘にぶつかり、はねかえり、次第に落ちていくようにあいつも落ちてったんだ。なぜ、もう少しうまく俺のように毎日を渡れないんだらう。他人のやった罪までひっかぶって、わざわざ自分の運命を狂わしてやがる。あの愚鈍な話しかた。俺が小児麻痺で体が不自由だと言っただけで、みんな与えてしまうような人のよさ。あれじゃ、どうにもなるまいな。』 吉岡はその酒場に出かけることにしました。

〔サフラン〕という店の女性から声をかけられた吉岡は、ミツが〈咲子〉という名で勤めていることを知りましたが、病院に行って休んでいるとのこと。その女性は『オデキでもなおしにいくんじゃない …』と言います。はっきりした病名は彼女もわからないようです。

ミツは吉岡に会う半年ほど前、手首に赤黒い銅貨大のすこしふくれた腫れ物のような〈しみ〉ができていました。痛くも、かゆくもなかったのですが、吉岡に抱かれた夜や田口さんの奥さんに、やっとかせいだ千円を渡したときに痛みを感じたことがありました。吉岡は自分がこの店に来たことをミツに伝えてほしいと名前と住所を書いた紙を渡し、店を出ました。そのとき、〈ある声〉を耳にします。

『 …突然、誰かが耳もとでぼく自身に問いかけるような錯覚に捉われた。今でもあの瞬間、どうしてあんな声を聞いたような気がしたのかふしぎである。』

(ねえ、君があの日、彼女と会わなかったら) と、その声は呟いた。(あの娘も別の人生を — もっと倅せな平凡な人生を送ったかもしれないな。)

(俺の責任じゃないぜ。) とぼくは首をふった。(一つ一つ、そんなこと気にしていたら、誰とも会えないじゃないか。毎日を送れないじゃないか。)

(そりゃそうだ。だから人生というのは複雑なんだ。だが忘れちゃいけないよ。人間は他人の人生に痕跡を残さずに交わることはできないんだよ。)]

1週間後、ミツから葉書が届きました。『お元気ですか。このあいだ、吉岡さんがお店にきてくれたときいてびっくりしました。おこらないでください。でももう、たずねないでくださいませ。仕方ないです。まえから体がわるく… 』。

翌日の夜、吉岡は喫茶店にミツを呼び出します。霧雨の降る夜でした。40分ほど待つて引き上げようとしたとき、『捨てられた猫のように雨に髪も顔も汚なく濡れて、古ぼけた傘を手にした彼女がぼんやりと立ってい』ました。ミツを今後、『新宿の女をだくかわりの相手にしようという衝動』に駆られていた吉岡は、なんとかもう一度つきあわせたいと思っていました。しかし、ミツは『あたし、病気だもん』『お医者さんに腕のハレモノを見てもらったら』『精密検査しなくちゃいけないって。だから、あたし、あさって御殿場に行くんだよ』『病院があるの。』と言います。吉岡は山中湖からの帰りのバスの中から見た病院を思い出します。『まさか、君…… 』。

吉岡という〈男〉と、ミツという〈女〉の人生がふたたび交わりました。わたしたちは、吉岡の生き方に眉をひそめると同時に、(それが占める領域はひとにより違いますが)

自分のこころの一部に彼と同じものをもっている …… と感じるのではないでしょう  
か？

今回は、神さまはなぜ、男と女をお創りになったのか、その出会いと交わり（性）の  
意味を考えていこうと思います。

【引用した書籍】 ・遠藤周作 『わたしが・棄てた・女』 （講談社文庫、1972）